

巻頭言 ベントス学会印象記

もう 20 年以上前のことになるが、日本動物行動学会設立総会のあいさつで、当時の日高敏孝会長が次のような趣旨を述べた。日本人の研究者は、その時々、欧米で主流とされるテーマに従って研究を始めるが、成果が出始めるころには「主流」は他に移って取り残されている。そこでまたそれを追いかけて、成果が出るころにはまた、ということをくり返してきた。そろそろこういう事態から脱却しないとイケないのではないか……。昨年東京で行われたベントス学会の発表を聞きながら、このことを思い出した。

今回の学会では、個人的には 2 つの発表が目をついた。これらはデータがしっかりしている上に話の筋立てが明快であり、評価するに足る。しかしそれだけに、かかえている問題点も浮き彫りになった。一つは、ムラサキインコとカメノテの共在メカニズムを調べた研究で、前者が後者の存在によって高温と強い波浪から守られ、利益を得ていると結論する。野外実験は入念で結果の信頼度も高いが、位置づけの議論が気になった。発表者はこれを、'facultative commensalism' (随意的片利共生?) の 1 例であるとする。共生の用語論には詳しくないが、facultative は obligate の対立語で「非特定」ということだから、相手を特定しない、つまり相手がカメノテでなくてもよいということか。実際発表者は、ムラサキインコは crevice に入るなどによっても同様の利益を享受できると述べていた。しかしこれが「共生」であろうか。私の素朴な理解では、共生の典型はクマノミとイソギンチャク、ハゼとテッポウエビのように、2 種が共存するため、行動や時には形態さえも変更するように進化してきた関係を指す。こうした関係の発見は、生物が個々ばらばらに生活しているかのような見方が一般的であったころ、人々の自然観を転換する新鮮さがあった。その後概念が拡大して、共生の中に片利共生等様々なパターンが含められるようになり、それに従えば今回の例は 'facultative commensalism'、ということになるのかもしれない。そして論文を書く場合には、この事例は (たぶん欧米の) だけそれの分類した共生概念のこれに当たるとか、どれについての例外だとかいう議論が行われるのだろうか、そういうことに意味があるだろうか。私にはこの研究の実質的意味は、ムラサキインコはカメノテ、岩の出っ張り、もしかしたら同種他個体であっても、とりあえずまわりに shelter になるものがあると生残や成長が良くなる、という点に尽きていると思われる。それを共生概念に仮託して議論しても、先に述べた、人々の素朴な自然観を、2 回反転させて元に戻ったというにすぎない。

もう一つの発表は、1970-80 年代に盛んだった、野外操作実験による海岸群集研究の問題点と限界を指摘し、今後のあり方を提起するものだった。問題点とは、調査範囲が狭い範囲に限られるために一般性を欠き、かつ描かれる群集像が複雑になりすぎて再現可能な法則を見出し難くなることである。その解決策として発表者は、大スケールの調査による一般法則の探求を提案し、日本全土に入れ子型に配置

したポイントでの調査結果を紹介していた。この発表では Oikos 誌の Lawton の論文を引用し、主張内容はほとんどそれと変わるところはない。しかし、発表者自身、Lawton が見通しが暗いと指摘した、小スケールの野外実験に基づく群集研究から出発したのではなかったか。それが、欧米の主流が転換するころ、自らの方針も同じ方向に変化している。大スケールの研究もいずれその欠陥を批判される時が来るだろうが、その時はどうするのだろうか。もちろん、たまたま欧米の変化と同時に、日本の研究動向が同方向に変化したとしても不思議ではない。しかし誰もがそのパターンでテーマを変え、それが長い間くり返されてきたとなると、その背景を考えなければならない。

「日本、欧米あと追い論」は、今に始まったものではない。冒頭の日高会長の発言もそうだし、1980年代始め、川那部浩哉は雑誌「科学」誌上で、「これは日本だけでなくアメリカあたりでも同様に いや、向こうの人の意見をいち早く取り入れて大声をあげた人が日本の個体群生態学者の中にもあった・・・」と、個体群生態学者を揶揄し、伊藤義昭がそれに激しく反発して論争した。その川那部は1982年の生態学会を見て、「西洋の一部で最近流行した説を使って自分の資料を解釈したものが、みごとに並んでいる」と嘆いている。さらに遡れば1960年代、当時興隆しつつあったDNA研究の追い風を受けて、柴谷篤弘が形態分類学などの古典生物学を「枚举」として否定したのに対し、江上不二夫がATPの研究史を引用しつつ、「大切なのは‘重要なテーマ’をやることではなく、自分のテーマを重要なものにして行くこと」と反論した。後追いばかりでいいのかと批判する人があれば、実績もなしに理想論を言うな、まず業績をあげよと反論する人がいる。日本人研究者は何十年も前から、同じことをくり返してきたのである。

もちろん、時の主流に乗って仕事をするほうが楽であり、業績も稼げるだろう。「自分のやっていることを重要にする」と言えば聞こえは良いが、実際には並大抵のことではない。私のように、標準的な方法で研究しているうちは欧米誌にもスムーズに載せてもらっていたのが、独自の方針でやり始めたたん reject の嵐に見舞われる、ということも覚悟しなければならない。つまり「後追い」も「流行の説を使った資料解釈」も、そうなるだけの理由はあるということである。だからそれが自分の限界と割り切ってやるならばそれもよい。しかしもし始めからそれしかないと思いついておくとすると、それは研究者の可能性の芽を摘み取ることになる。たとえば American Naturalist のような理論誌の論文を読むにしても、「勉強させてもらおう」という姿勢で読むのと、「自分がもしここに書くとすれば」という意識で読むのでは全然ちがう。後者の立場に立てば、そのために何が必要かという発想で研究するだろう。私もそろそろ限界が見えてきたが、まだ意欲は捨てていない。まして若い人たちが前者の発想ばかりでは困るのである。志は高く持ちたい。

< S >